
IS ~ インフィニット・ストラトス ~ 俺と仲間の非日常

終焉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス） 俺と仲間の非日常

【Nコード】

N7583Z

【作者名】

終焉

【あらすじ】

オリ主がIS学園で一夏達と共に繰り広げる学園物語です。一夏ハーレムは篤、鈴音、セシリアの三人。それ以外はオリ主ハーレム魔法少女リリカルなのはと少しクロスストーリーです。いろんな漫画の技や武器も出す予定です。作者は小説作りの初心者です。

プロローグ

side 影人

影人「・・・朝か・・・」

> i 3 7 6 8 9 — 4 7 2 3 <

俺、あんこく暗黒影人は今日から始まる高校生活のために目を覚ました。

俺はどうやら神様に嫌われているらしく、よく日常が非日常になる。今回もまた一般的な生活をおくれなくなった。

影人「・・・まあ、いつものことだけだな・・・」

ベッドから降りて、そのまま居間に向かう間、思わずそう呟いた。

IS、正式名称インフィニット・ストラトス。それが俺の日常を非日常に変えた元凶だ。

ISは本来、女性にしか扱えないもので、今の女尊男卑の世界を生んだ大元凶だ。

一か月前、俺は廃工場で廃棄される予定のISを偶然見つけた。俺は前々からISの作りがどうなっているのか興味があったためそのISを調べようとして触れてしまい、そのときなぜか男である俺に反応し、勝手に所有者認証が行われてしまった。

そのことが世界にばれ、IS学園の教師が俺の家に直に来て入学用の資料を渡していったのが切っ掛けだった。

影人「・・・あの時の戦闘も原因かもしれない・・・」

起動したとき突然現れたIS四機（無人機）を初めて起動させた人間が全部行動不能にしてしまった、というのも原因・・・だと思う。影人「・・・さて、いつまでも悔やんでいても仕方ないし行くとするか」

嫌な予感しかしない、あのIS学園へ・・・

俺は髪の毛のセットや荷物の準備を行い、しっかりと制服を着込んで、不安な気持ちで家を出た。

主人公設定

> i 3 7 7 0 1 — 4 7 2 3 <

名前：暗黒あんこく影人かげと

容姿：銀髪で赤い瞳、中性的な顔つきで無表情

性別：男

身長：165cm

体重：52kg

趣味：料理、読書

特技：料理、機械いじり、物作り、歌、声帯変化

好きな人（物）（こと）：友達、家族、一緒にいて楽しい人

嫌いな人（物）（こと）仲間を傷つける奴、人を傷つける・殺すこと

専用IS：サタンソウル（悪魔の魂）

追記：体形は、筋肉はあまり無いが人外と言えるほど身体能力が良く、武器なしでもISを倒すほど強い。

一夏と筈と鈴音とは三年前に自身が転校したため別れたが幼馴染。

影人のIS設定

> i 3 7 7 3 5 — 4 7 2 3 <

IS名：サタンソウル（悪魔の魂）

待機状態：悪魔を模したキーホルダー

詳細：第四世代に相当するが、作成者は不明であり、誰一人として所有者認証を受け付けなかったために元々廃棄処分される予定だったIS、超遠近・中距離型

《武器》

ビームライフル

レーザーガンを連射することが出来る、エネルギーをためることで100まで連射可能

超電磁レール砲

エネルギーを最大100%までためることができ、その分威力が上がる

ビームサーベル

ビームの部分はレーザーなどのエネルギーを吸収することができ、その分ビームの部分が強化される

ダークソード

何も切ることが出来ない剣、頑丈なので盾代わりとしても使える、影人は主にこの武器を使う

第1話「クラスメイトと自己紹介」

side 影人

影人「・・・思ったとおりだな」

俺は今、教室にいる大半の女子に視線を向けられている。・・・確かにIS学園に男子がいることは珍しいと思うが、こんなに注目しなくてもいいだろ。

IS学園のこのクラスには俺の幼馴染である織斑一夏おりむらいちかがいるんだが・・・

一夏「・・・」

どうやら周りの目を気にしないようにするために自分の世界「思考の中」に入っているらしい。・・・あいつ、俺がいることにも気づいてないな。

6

真耶「全員揃ってますねー、それじゃあSHR始めますよー」

黒板の前でにつこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生やまたまや。

身長はやや低めで生徒のそれと殆ど変わらない。というか、あれは制服を着ていたら混ざってしまうんじゃないだろうか。

・・・何となくだが、無理に背伸びしている感じがするんだが・・・
そう思うのは俺だけか？

真耶「それではみなさん、一年間よろしくお願いしますね？」

影人以外「・・・」

影人「……よろしく願います」

影人以外「……!?!」

真耶「は、はいっ!よろしく願います!」

にっこりと喜ぶ山田先生。

「……なんでみんな返事しないんだよ。一夏にいたってはまだ自分の世界「思考の中」の入ってるし……。イレギュラーである俺たちばかり気にしないで先生の話も聞けよ。」

真耶「それでは自己紹介をお願いします。えっと出席番号順で……」

俺の順番がくるまで、今までことを振り返ってみよう。世界でただ二人「IS」が使える男、暗黒影人と織斑一夏が公立IS学園にいる。一夏は俺より前にISが適合した世界初の男性のIS起動者だ。俺は一夏がテレビに出たとき思わず飲んでいたコーヒートを吹き出してしまった。……一瞬、犯罪でも行なつてテレビに出たかと思つたからだ。

真耶「次は、えーつと……暗黒影人くん?」

> i 3 8 2 8 3 — 4 7 2 3 <

影人「……はい」

どうやら俺の番が回ってきたようだ。

俺が立ち上がると、一気にクラス中の女子の視線が集中してきた。

・・・言わずらいな。

影人「・・・暗黒影人です。趣味は料理と読書。今年は俺とそこに
いる織斑一夏というイレギュラーがこのES学園に来てしまい、皆
さんに迷惑が掛かるかもしれません、これからよろしく願いま
す」

俺は一礼する。それを見た山田先生と多数の女子が『こ、こちらこ
そよろしく願います』とか言いながら少し頭を下げる。・・・
真面目だな。
それに比べて・・・

一夏「・・・・・・・・」

影人「・・・いつまで現実逃避してるつもりだ」

俺は筆箱からシャーペンを取り出し一夏の机に飛ばした。

一夏「うわっ!?!」

ザシュツ!と机に突き刺さる。それと同時に一夏が慌てながら大
声
を上げる。

一夏「この迷いのないシャーペンの突き刺さり方・・・まさか!?!」
バツ!と一夏が俺の方へと振り向く。

一夏「か、影人か?」

影人「・・・それ以外に何がある。現実逃避もいいが諦めも肝心だ

ぞ」

一夏「な、なんでお前がここにいるんだよ！つーか今までなんで連絡くれなかったんだよ！」

影人「・・・騒ぐな、みんなに迷惑だ」

一夏「あつ、すまん。・・・じゃなくて！質問に答えろよ！」

影人「・・・一つ目の質問は、お前と同じでISを起動させることが出来るから。二つ目の質問は、連絡したくてもお前の電話番号を知らないから」

一夏「お前ならそれぐらい調べられるだろ！」

影人「・・・お前は俺を犯罪者にしたいのか？」

・・・まったく、三年ぶりに合ったのに全然変わってないな。

影人「・・・俺のことは後で説明するから、今は自分の自己紹介をしろ。順番では次はお前だ」

一夏「ま、マジかよ」

一夏は周りを見渡してみる。女子たちの視線が突き刺さる。

一夏「お、織斑一夏です」

一夏を見ているみんなの目が『もっと色々喋ってよ』とか『それだけ？』とか『これで終わりじゃないよね』的なことを言ってるよう

な気がした。

一夏「以上です！」

ガタタタツッ!!!

一夏「えっ、あれっ!?ダメでした!？」

あの一言で殆どの女子がずっとこけていた。まあ、自己紹介が名前だけとか誰も思わないからな・・・

スパアン!!!

一夏「ぐうっ!？」

いきなり一夏が誰かに叩かれた。・・・あれはもしかして・・・

一夏「げえっ!!!関羽!？」

・・・馬鹿、そんなこと言ったら・・・

スパアン!!!

ほら、また叩かれた。相変わらず学習能力がないな。

一夏「ぐふぁ・・・」

千冬「誰が三国志の英雄か馬鹿者」

一夏を出席簿で叩いた人物は一夏の姉である織斑千冬おりむらちふゆさんだった。・

・・・出席簿つて武器に使う物じゃないだろ。

真耶「あ、織斑先生、もう会議は終わられたんですか？」

千冬「ああ、山田君、クラスの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

真耶「い、いえ、私は副担任ですから、これくらいはしないと・・・」

「

山田先生は熱っぽい声と視線で千冬さんに応えている。・・・あ、はにかんだ。

千冬「諸君！私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け、いいな？」

・・・なんとというか、教師っていうより教官だな。こんな指導の仕方で教え子が付いてくるのか？

だがしかし、教室に響いたのは困惑の声ではなく、

女子多数「きゃああああああああああああっ！！！！」

黄色い歓声だった・・・

女子1「千冬様！千冬様よ！！」

女子2「ずっとファンでした！！」

女子3「私、お姉様に憧れてこのIS学園に来たんです！北九州から！！」

・・・千冬さんってそんなに有名だったのか、知らなかったな。

女子4「あの千冬様にご指導をいただけるなんて嬉しいです！！」

女子5「私、お姉様のためなら死ねます！！」

・・・心意気はいいが、死ぬのは良くない。

きゃいきゃいと騒ぐ女子たちを、千冬さんはうつとうしそうな顔で見る。

千冬「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

・・・口ではそう言ってるけど本当は満更でもないんでしょ、少し微笑んでるし「普通の人では気づかないくらいの微笑み」。

女子6「きゃああああああああああつ！！お姉様！もっと叱って、罵って！！」

女子7「でも時には優しくして！！」

女子8「そしてつけあがらないよに躰をしてっ！！！」

クラスメイト元気だな、・・・この一年、楽しくなりそうだ。

千冬「……で？挨拶も満足に出来んのか？お前は……」

一夏「いや、千冬姉、俺は……」

スパアン！！

本日三度目。……これで一夏の脳細胞が合計一万五千個死んだな。

千冬「織斑先生と呼べ」

一夏「……はい、織斑先生……」

今のやり取りで、姉弟なのがバレた。

女子9「え……？織斑くんってあの千冬様の弟……？」

女子10「ああつ、いいなあ！代わってほしいなあつ……」

と、まあこんな感じに騒がしくなり、興奮しきった女子たちを千冬さんが無理矢理鎮めたりしていた。

千冬「さあ、SHRは終わりだ。諸君にはこれからISの基礎知識を半月ほどで覚えてもらう。その後実習だが、基本操作は体に染み込ませる。いいか？いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

……もはや強制になってる。相変わらずだな。

千冬「暗黒、何か言いたいこともあるのか？」

影人「・・・いえ、特にありません」

千冬「ならいい」

・・・感の良さもいつもどおりだな・・・

第2話【再開の幼馴染】

side 影人

一夏「説明しろ、影人！」

SHRが終わり一夏が俺のもとに来た。

影人「・・・俺は今まで束さんの所にいたんだ。あそこでは色々と忙しくて、帰れなかつたんだよ」

一夏「束さんと？へえ、束さんは元気だったか？」

影人「・・・ああ、生活は少し問題だったが何とかやってる・・・はずだ」

一夏「束さんも千冬姉と同じで家事スキルがないもんな」

影人「・・・それより一夏、俺たちはいつから動物園のパンダに近い存在になつたんだろうな」

一夏「I Sを起動させてからだろ。俺なんか家に科学者が来て俺の髪や皮膚の一部を実験に使うから寄越せ、とか言われたぞ。そいつらは千冬姉がボコボコにしてたけどな」

・・・哀れな科学者、だが自業自得だ。それより今は俺たちに置かれている状況だ。廊下には二、三年をも含む女子のオンパレード、俺たちを見るために駆け付けたいらしい。

女子1「あの子たちよ！世界でISを使える男の子って！」

女子2「入試の時にISを動かしたんだって！」

女子3「彼謎のIS持ちなんだって！」

女子4「世界的な大ニユースだったわよね！」

女子5「やっぱり入ってたんだー！」

・・・先輩方もみんな元気ですね。

女子6「あなた話しかけなさいよ！」

女子7「あたし行っちゃおうかしら・・・」

女子8「ちょっと！まさか抜け駆けする気じゃないでしょうね！？」

喧嘩は良くないぞ。

美希「二人とも久しぶりー！」

篤「変わらないな、お前たちは」

一夏「え？」

影人「・・・ん？」

不意に声を掛けられた。・・・この二人、どこかで・・・もしかして、

影人「・・・美希と篤か？」

一夏「やっぱりそうか！久しぶりだな！」

目の前にいたのは六年ぶりの再会になる幼馴染の篠ノ之篤と、三年ぶりの再会になる幼馴染の小野寺美希だった。

一夏「そういえば、去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう、篤」

篤「なんでそんなことを知ってるんだ／＼」

一夏「なんでって、新聞で見たし・・・」

美希「一夏くん、新聞読んでたんだ・・・意外」

影人「・・・俺はてっきり公告だけだと思っていた。一夏はオカシ系男子だからな」

一夏「新聞は天気予報をチェックするために見てんだよ。洗濯物を干した時に雨でまた洗濯しなおし、なんてことがあったら嫌だからな」

篤・美希「主夫だな（ね）」

影人「・・・それにしても二人ともIS学園にいるとは・・・IS学園に来て、いいこともあるものだな」

一夏「そうだよな、俺たちがISを起動させられなかったら会えな

かったもんな。俺もそのことに関しては良かったよ」

美希「私も会えて嬉しいよ」「かげくんが入学することを知ったからIS学園に入学したんだけどね」

篤「そうだな」「一夏も私に会えて嬉しいのだな」

女子9「ちょ、ちょっと抜け駆け！？まさかの抜け駆け！？」

女子10「ず、ずるい！二人だけ仲良くしちゃって！私たちにも紹介して！」

女子11「者ども出会え出会えい！」

女子12「きゃっ！ちょっと、押さないでよ！」

廊下の女子たちが流れ込んでくる。

美希「きゃあっ！」

美希が女子たちとぶつかり倒れそうになる。それを俺が支えようとするが、俺もそのまま倒され美希が俺を押し倒す格好となる。

美希「かげくん、大丈夫？」

> i 3 8 5 0 2 — 4 7 2 3 <

影人「……ああ、それより早くどいてくれ」

美希「……」。「今この瞬間を失うのはあまりにも惜しい……」

」

影人「?・・・おい美希、聞いているのか?」

女子13「ず、ずるい!自分だけ押し倒して!」

女子14「羨ましい・・・」

女子がどんどん騒がしくなる。俺は自力で美希をどかし立ち上がる。

美希「あっ・・・「もうちょっとああしていたかったな・・・」

影人「・・・どうかしたか、美希?」

美希「な、なんでもない!なんでもない!気にしないで!//」

影人「・・・そうか」

一夏「影人の奴、相変わらず鈍感だな。美希が可哀相だ」

篤「・・・お前は人のこと言えんだろ朴念仁が。人の気も知らないで・・・」

一夏「なんか言ったか、篤?」

篤「なんでもない!」

美希「はあく・・・なんで二人ともこんなに鈍感なんだろうね」

・・・二人ってことは俺も含まれているのか?俺は結構勘は鋭い方

だぞ。

そんなこんなで騒がしかった教室は、数分後チャイムが鳴ったと同時に静かになり授業が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7583z/>

IS～インフィニット・ストラトス～ 俺と仲間の非日常

2012年1月6日01時45分発行